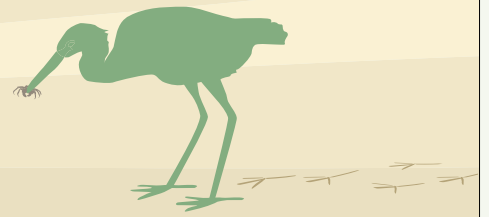


なぎさ NEWS



冬の調査もおもしろい!

水族園では一年をととして「西なぎさ」にどんな生き物が生息しているのかを調査しています。冬の調査は風があればとびぎり寒く、生き物の活動が活発な春や夏にくらべて、観察できる生き物もぐっと少なくなります。しかし、一年をととして調査することで、生き物の季節変化や生活史がはじめて見えてくるので、冬の調査も重要です。また、ひっそりと静かな干潟でも生き物の息づかいを感じることができると、うれしいものです。今回は冬の調査の様子を紹介します。



2月10日 (気温 7.0℃ / 水温 10.0℃) 地曳網調査

水族園では、葛西海浜公園「西なぎさ」で小型地曳網を用いた生物調査を行っています。一年を通して行っている調査ですが、冬の調査はなかなか過酷なものです。風が非常に強く吹くことがあり、服を着込んでも濡れた手は防ぎようがなく、どんどんとかじかんでいきます。風が地曳網の中に入ってしまうと、もう大変。凧揚げのように巻き上がってしまうこともしばしば…。風を受けすぎないように網を操作しなくてはなりません。また、冬は網に入る生き物の種類や数が、一番少ない季節です。大変な思いをして網を曳いてきても、入っている生き物の少なさにとてもがっかりすることもあります。そんななか、冬にしか見られない生き物もあります。一つはカブクラゲ。ミズクラゲなどの刺胞を持つクラゲとは分類上、別のグループで、虹色に光を反射する櫛板をもつなみだです。風向きによっては、大量に「西なぎさ」に流れつきます。もう一つはアユの仔稚魚です。1～3月ごろに見られ、その後、少しの期間、海で成長した後、川を遡上していきます。同じ場所でも、季節や年ごとに見られる生き物は変わります。冬の調査は大変ですが、継続していくことで「西なぎさ」の生き物の変化を把握できるのです。(調査係 市川 啓介)



風で吹き上がる地曳網、「おっと、飛ばされそう!」

2月28日 (気温 14.3℃ / 水温 7.6℃) 生き物調査

干潟を歩きながら観察される生き物を記録する「生き物調査」。冬の「西なぎさ」は冷たい風が身にしみませんが、晴れていれば高層ビル群のむこうに富士山が見え、沖にはスズガモやカイツブリ類の群れが観察でき、またひと味違った景観を楽しめます。

さて、寒いなか、干潟の生き物はどうしているのでしょうか？見渡してみても、ひっそりと静まりかえっていて、生き物の気配を感じられないのですが、だからこそ「わずかな気配を見逃さないぞ!」というスイッチが入ります。じっくり探せば、数は少ないですが、泥の上をゆっくりとはっているアラムシロや、はさみをノロノロと動かすオサガニの姿が見えてきます。まだ寒いけれども、とりあえず外に出てきたという感じです。砂を掘れば、脚を縮めて動かないコメツキガニも見つかります。

2月の調査ではちょっと変わった生き物が見つかりました。今までほとんど観察されることがないスナヒトデです。沖の砂地でくらしていたものが、流されてやってきたのかもしれない。冬であっても、こんな新しい発見があるのが、フィールド調査の楽しさです。(教育普及係 天野 未知)



たくさんのスナヒトデが吹き寄せられていた